

日本と 世界を 揺り動かす 物凄いこと

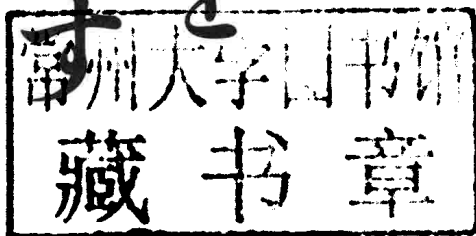
masuda etsusuke

増田悦佐

日本と
世界を
揺り動かす
切実なこと

ida etsusuke

増田悦佐



増田悦佐

(ますだ・えつすけ)

1949年東京都生まれ。経済アナリスト。一橋大学経済学研究科修了後、ジョンズ・ホプキンス大学大学院で歴史学・経済学の博士課程修了。ニューヨーク州立大学助教授を経て、外資系証券会社などでアナリストを務める。主な著書に『3・11に勝つ日本経済』（PHP 研究所）などがある。

企画・構成———中島孝志

装丁・デザイン——山田英春

にほん せかい ゆ うご ものすご 日本と世界を揺り動かす物凄いこと

2011年8月5日 第1刷発行

2011年9月7日 第5刷発行

著者……………増田悦佐

発行者……………石崎 孟

発行所……………株式会社マガジンハウス

〒104-8003 東京都中央区銀座3-13-10

電話 受注センター 049-275-1811

書籍編集部 03-3545-7030

印刷・製本……株式会社リーブルテック

乱丁・落丁本は小社製作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーと帯に表示してあります。

<http://magazineworld.jp/>

©2011 Etsusuke Masuda, Printed in Japan

ISBN978-4-8387-2282-2 C0095

日本と世界を揺り動かす物凄いこと

はじめに

二〇一一年三月一日、世界を震撼^{しんかん}させるような自然災害が起きた。東日本大震災だ。それから四カ月以上のときが経った。日本は、そして世界はこの大震災以前と以後でどう変わったのだろうか。今後どう変わるのだろうか。

いちばんはつきりしたのは、日本の製造業、とくに中間財・資本財産業の世界経済に占める重要性だろう。そして、「日本の製造業は円高によつてすぐにも滅亡の危機に立たされる」という主張の大ウソぶりも明らかになった。世界に名を知られた製造業の大企業で、日本からの部品供給が滞つたために、操業短縮や操業中止に追いこまれた会社が続出した。

一方、独占的なニッチを掌握している日本の中間財製造業者の多くが、「供給責任を果たすために、多少のコスト高は覚悟で海外にも生産拠点を設ける」と表明している。つまり、「日本の輸出産業は、円高で存亡の危機に立たされている」どころか、諸外国では造れないようなものを造つて日本国内にしか生産拠点がなくとも悠々と儲けていたのだ。そして、今後は多少利益を犠牲にしても、日本国外に生産拠点をつくつて安定供給への期待に応えたいと言っているわけだ。

四〇年間ほとんどぎれることなく円高が続いたのに、それによつて貿易収支が長期的に悪化し

たことがない国なのだから、当たり前のことなのだ。だが、その当たり前前の議論がまったく通用せずに、四〇年間にわたって起きなかった円高による貿易赤字の発生・拡大を主張する人がいまだに多い。

世界広しといえども、ここまで経済の現場第一線が持つ感触と、いわゆる知識人の唱える「理論」の隔たりが大きいのは日本だけではないだろうか。そこまでは、いろいろな人も指摘している。だが、ほとんどの場合、議論はこのギャップをどう埋めて知識人の問題認識を現実に近づけるかといった方向に集約されてしまう。

私が主張したいのは、知識人がまったく無能で現実を鼻先に突きつけられても分からないほどお粗末だからこそ、日本の大衆はがんばってきたのだということだ。そして、もし日本の知識人をあのすばらしい無能さから救ってしまったりしたら、たちまち世界一優秀な日本の大衆だつて「指示待ち族」に墮落してしまい、日本も欧米同様の知識人が命令し大衆は服従するだけの社会になってしまう。

ずる賢い知識人たちが、国家官僚として、政治家として、価格支配力を持った大企業の役員として「君臨」している欧米諸国の現状を見ていただきたい。一九八九年末から一九九〇年にかけて崩壊した日本のバブルを後始末する約二〇年間におよぶ過程で、一度として見たことがなかったような醜悪な光景が、日替わりメニューのように現れては消える毎日だ。

支配階級の有能さは、ちっとも大衆のためにはならない。むしろ、無能な支配階級を持つ国の大衆こそ幸福なのだ。今回の経済危機は、ようやくこの単純な事実を世界中の人々に知らせる号砲と

なるだろう。ずる賢い指導者たちが悪あがきする国ほど、末路は悲惨になる。その中で、日本の大衆は初めから終わりまで政治・経済・行政の指導者を無視して自分たちが正しいと考えることをやりつづけていれば、それだけで自然に浮上してしまうのだ。

世界貿易の中心は、確実に北大西洋地域からインド洋・太平洋地域に移動する。それにつれて、世界経済の中枢も、従来の欧米諸国から他の国に変わらざるをえない。中国やインドには世界経済の中枢を担う資格がないどころか、自国民を大量の餓死や、民族間・多言語間の暴動から守る能力さえないことが露呈するだろう。

日本はいやでもおうでも、この困難な時期に世界経済の中枢を担わざるをえなくなるだろう。別に肩ひじ張る必要はない。今までどおりに偉い人の話を聞かず、自分が正しいと判断するとおりに動けばいいだけのことだ。ただし、世界中あらゆる国を誉めちぎり、日本をけなしつづけるマスコミの論説ばかり読んでいると、正しい方向の判断さえできなくなる。

この本を読んで疑問を感じられたら、ぜひマスコミの論説だけではなく、統計データに直接当たってみてほしい。いかに日本のマスコミの論調が歪曲^{わいきよく}されているかに驚かれることだろう。その上で、判断はあくまでもご自分で下していただきたい。

日本と世界を揺り動かす物凄いこと — ● 目次

はじめに — 3

第一章

逆境が

日本を強くする! — 15

● 日本人は地震や津波と折り合いをつけないければ生きていけない — 16

● 急流ばかりの日本の水系が、うまい主食と繊細な味覚を育てた — 19

● 消波堤の復権を! — 21

● 大自然の猛威と豊かな自然の恵みは表裏一体 — 23

● リーダーが頼りないからこそしつかりせざるをえない日本の大衆 — 26

● それにしても、なぜ暗い話、悲惨な話ばかりが多いのか — 28

● 欧米知識人はなぜ日本のリーダーたちを憎悪するのか？ 31

● 日本の政財官界トップの無能さは、欧米知識人に恐怖を感じさせる 34

● 「欧米は夢の世界」というマインドコントロールはそろそろ脱却すべき 36

● 中でも悪質なのがフランスの知的エリート独裁だ 39

● 慢性的な経常赤字国は、「植民地支配」を当然と思っていた国ばかり 41

● いよいよ耀きを増す日本の中間財・資本財主体の貿易構造 44

第二章

「地球温暖化」は

史上最大の詐欺事件 47

● 風力発電と太陽光発電の現実を直視せよ 48

● 太陽光発電事業は補助金狙い？ 51

● 保護政策で成功する事業など一つもない！ 53

● 地球温暖化危機説はペテンだ！ 55

● 人為的温暖化論は、証明すべきことを前提にする詭弁 57

- 温暖化の大部分は純然たる自然要因で説明できる ————— 59
- 最貧国の飢餓を促進するともんでもない愚策・バイオエタノール ————— 61
- 環境保護運動の「守護神」アル・ゴアの正体 ————— 64
- 「温暖化」「二酸化炭素元凶」説が詐欺なら、詐欺師の黒幕はだれか？ ————— 67
- 企業に増産本能はない ————— 70
- 罪の意識は最上の収益源 ————— 72
- 石油産業の歴史はカルテルの歴史だった ————— 75
- こうして、オイル・メジャーの業績は完全回復した ————— 77
- いろんな謎の答えが見えてくる ————— 79

第三章

国家ぐるみの粉飾決算！

アメリカ経済はすでに破綻している！ ————— 81

- 慌ててリビア利権争奪戦に加わったアメリカ ————— 82
- 必ずアラブの春はやってくる！ ————— 84

- 一九七九年から政治も経済も社会も腐敗していく！—— 88
- 第二次オイルショックで最大の被害を受けたのはアメリカだった！—— 90
- アメリカだつて、経済が健全な時代は終身雇用だった！—— 92
- ロボ・サイナー・スキヤンダルが象徴するアメリカ金融業界の退廃—— 94
- アメリカは長い衰退過程に入った—— 96
- アメリカがすでに破綻しているこれだけの証拠—— 98
- アメリカは世界中にインフレを撒き散らした！—— 100
- エゴイスト、グリーン西班牙の魂胆！—— 103
- 公務員天国さえ格差付きのアメリカ—— 106
- デフォルト危機は有力州の地方債から始まる—— 109
- 一ドル＝四五円になる！？—— 112
- アメリカのデフレは地獄になる！—— 115
- デフレは生産縮小につながりさえしなければ、なんの弊害もない—— 117
- 「強いドル復活」はかけ声にすぎない—— 119
- こんな高金利、だれが払えるのか？—— 120
- 欧米の金融機関はマチ金と同じ！—— 122

第四章

既定路線だったギリシャのデフォルトさえ ギリ押しできないドイツは危ない

125

●ドイツ経済は五年以内に破綻する!?

126

●これから本格的になるユーロ危機

128

●ギリシャさえ人身御供にできないユーロ圏諸国の弱腰

131

●投機マネーに翻弄されたアイルランドも自業自得

135

●共通通貨は国家破綻の引き金

138

●ユーロこそがヨーロッパ経済低迷の根源

140

●詐欺師同然の手法で凌いできたヨーロッパ

142

●ドイツが抱えるアイルランドとスペインという爆弾

144

●ドイツとスイスはユーロを捨てられるか

146

●ロールスロイスはBMWとフォルクスワーゲンに買収された

149

●先端技術に太刀打ちできない教育システムと技術力

151

●根強く残るエリート支配の構造

153

- 教育の底上げ、人材の流動化は決してしないフランス ————— 156
- 日本は、来るヨーロッパとアメリカの対立を静観せよ ————— 158

第五章

いよいよ中国の

バブル崩壊が始まった！ ————— 161

- 金満中国に迫力負けしたアメリカ ————— 163
- 技術がないからM&Aに突っ走る ————— 164
- 世界中の資源独占に突っ走る中国 ————— 166
- 世界に広がる「大中華」共栄圏 ————— 169
- 資源がないから技術開発に成功する日本 ————— 172
- 自動車メーカーのつぶし合いが始まる！ ————— 176
- 「世界の工場」からいよいよ転落する中国 ————— 178
- 何をやっても収まらない物価インフレと、そろそろデフレに転ずる資産価格 ————— 180
- メディアの中国報道はウソばかり ————— 183

●国内要因が大きい人民解放軍の増強——185

●共産党と資本主義の結びつき——188

第六章

デフレと円高で

日本経済はさらに強くなる！——191

●デフレ経済を最大に享受している日本と日本人——192

●経済学を知らないポール・クルーグマン——193

●米ドルの価値は九七年間で九六パーセントも毀損している！——195

●インフレで得をするのは借金体質の大企業と国家だけ！——197

●デフレ経済で最大のメリットを受けるのはだれか？——200

●中国企業のもろさ、日本企業のすごさ——201

●円高で日本経済はさらに良くなる——204

●世界経済の変貌にいちばんうまく対応した先進国は日本だ！——206

●日本国債にきびしい海外格付け機関のほうがおかしい——209

- 政府の借金と国民の借金を混同してはいけない ————— 212
- 税金と国債はまったく同じもの ————— 215
- ネガティブキャンペーンに懸命な日本のメディア ————— 218
- まともで優秀な企業でさえ利益率が低い競争環境 ————— 220
- ガリバーのいない商圏のほうが消費者は得をする! ————— 221
- 日本の官僚はなぜ欧米のマネをしたがるのか? ————— 224
- 日本ほど輸出依存度の低い国はない! ————— 226
- 最先端技術を実用化させる秘密は仲間意識にある! ————— 229
- 特許輸出でも、今後の成長分野でも日本は世界一! ————— 231
- 政治家や官僚や財界首脳に口出しさせなければ、日本は絶対うまくいく ————— 234

